第 123 回関西スペイン語教授法ワークショップ(TADESKA) 開催の報告

CXXIII Reunión del Taller de Didáctica de Español de Kansai

日時：2018 年 12 月 9 日（日） 10:30 - 12:30

場所：関西学院大学梅田キャンパス(ハブスクエア) 1408 教室

担当者：川口正通

『教授法（おしえかた）～新しい挑戦～』

「スペイン語授業における訳の意義について」

* Fecha y hora: domingo, 9 de diciembre de 2018, de 10:30 a 12:30

* Lugar: Universidad Kwansei Gakuin, Campus de Umeda "K.G. Hub Square", Aula 1408

* Encargado: Masamichi KAWAGUCHI

* Metodología: nuevos desafíos

“¿Qué sentido tiene traducir en la clase de ELE?”

今回はワークショップ形式ではなく、担当者がスペイン語学習者およびスペイン語教員に対しておこなったアンケート調査の結果を報告し、その後参加者からのコメントや質問に基づいてディスカッションをおこなった。なお、担当者からの調査報告の内容は、2018 年 9 月にスペイン、サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学において開催された XXIX Congreso de ASELE で担当者がおこなった口頭発表と同内容である。報告の内容を以下にまとめる。

外国語授業において、学習言語から学習者の母語への訳、またはその逆の作業をおこなうことがあるが、これはしばしば批判的となっている。その理由としては、訳をすることによって母語で考える癖が抜けず、結果として学習言語の習得を阻害するといった考えによる。しかし、たしかに授業時間内で訳のみをおこなうことには問題があるかもしれないが、逆に訳の利点を指摘する研究も存在する。このような背景から本研究では、学習者と同じ日本語を母語とするスペイン語非ネイティブ教員の観点から、スペイン語授業における訳の役割を考察し、訳をツールと解釈することを提案した。まず第 1 節では、日本における訳の扱いを概観し、批判と擁護の両方があることを確認した。その後の第 2 節で、当該テーマを議論する上で必要な観点として、「学生は訳についてどのような意見を持っているか」、「教員は訳についてどのような意見を持っているか」、「教員はスペイン語の授業で学生に何を学んでほしいと考えているか」という 3 つを提案した。次に第 3 節で、上記 3 つの問いに対する答えを求めめるため、日本の大学でスペイン語を学習する学生 257 名およびスペイン語教員 16 名を対象に実施したアンケート調査の概要を述べ、続く第 4 節でその結果を報告した。調査の結果、大部分の学生および教員が、スペイン語授業において訳をすることについて意義を感じていることがわかった。その理由としては、「日本語の方が理解しやすいから」という理由に加え、「自分が（または学習者が）内容を理解しているか否かの確認が

容易だから」、「母語を新しい視点から眺めることができる」、「母語と学習言語との違いに着目することができる」といった理由も挙げた。「スペイン語の授業で学生に何を学んでほしいか」という教員向けの質問については、「スペイン語を学んでほしい」という回答をした教員は少なく、むしろ「視野を広げる」などの側面に関連するものが多く見られた。その観点からいえば、訳の作業は有意義なツールとして機能するものと考えられる。

担当者からの以上の報告に対し、参加者からは次のようなコメントがあった（矢印以下は参加者からのコメントに対する担当者の私見）。

- 「訳読に学生が慣れている」ということだが、本当に慣れているか。訳をやったことのないような学生が入ってきている気がする。
→次の項目を参照
- 高校では、英語に力を入れている学校（SGH など）とそうでない学校があつて、訳をするかどうかは両極端かもしれない。
→たしかに、大学の教員は最近の中学・高校でどのような外国語授業が実施されているのかを把握していないため、この可能性は否めないと思います。外国語授業においておこなう訳では、初級レベルではいわゆる「定番の訳し方」のようなものがあるように思われ、それは中高の英語授業である程度学んで来ることが多いのではないかと考えているのですが、実際に担当者の勤務校でも、少ないながら文法習得や日本語訳に戸惑う学生も存在します。
- 入試に訳があるのであれば、高校で訳をするのはやむをえない。
→おっしゃる通りだと思います。外部試験の導入などによって今後変わって行くのでしょうか。
- 訳のタイミングとバランスが大事。
→訳だけをやっている授業というのは、担当者も問題だと思います。何事にも利点と欠点がありますので、他の活動と相互に補完する形でおこなうべきであろうと思います。
- 辞書や Google translate は完璧ではないことを知るべき。うまく使えるように教える必要。
→外国語学習において Google translate を使うことについては、担当者はまだ心理的に受け入れられないのですが、辞書についてはその通りだと思います。ちなみに、訳の意義を主張するような報告をおこないましたが、たとえ名訳ができたとしても、訳には限界があることも、学習者には知ってほしいと思っています。
- 講読の授業のテスト対策で、訳を覚えるだけの人がいた。
→担当者は、授業内では訳をしますが、試験にはあまり出題しないようにしています。ご指摘の通り、訳を覚えてくるだけの学生もいますし、また採点する側も大変だからです。

スペイン語授業における訳の意義については以前から考えていたが、今回参加者の方々と正面を切って意見交換ができたことは大変有益であった。参加者の方にも何らかの示唆があつたのであれば幸いである。今後も引き続き、当該テーマについて考えていきたいと思う。